

近世末期における名主の都市官僚化

小 林 信 也*

はじめに

1. 苗字三名主入牢一件と諸掛名主の廃止
2. 天保改革と諸掛名主
3. 掛名主の活動事例
 - (1) 川浚掛
 - (2) 諸色掛

おわりに

キーワード 熊井理左衛門 肝煎名主 世話掛名主 水茶屋 亀の尾

はじめに

本稿では、近世後期・末期の江戸町方の行政において名主が果たした役割について検討する。¹⁾特に天保改革期から安政年間（1854～60）にかけての掛名主という名主の役職に注目する。

社会・経済の変容が進み、それに応じて幕府による行政刷新が繰り返されるなか、江戸の都市行政の様々な分野で名主の果たす役割は拡大し、名主組織の発達がみられた。これまでの研究では、名主の仕事は拡大・充実・発達するというよりは、幕末に向かって墮落・腐敗していくといわれることも多かったが、行政という視点では能力を高めていくというのが基本的な流れといえる。

ただし幕府の側には矛盾があり、名主組織の発達は「ジグザグの途」をたどることになる。幕府が抱えた矛盾とは、町奉行所は人手が少なく（二百数十名で五十万の江戸の人たちを支配する）、限られた人員で都市行政の拡充を図り、社会の複雑化にともない次々と発生する社会問題に対処することは、不可能であった。そのため、名主に対する期待は大きくなり、名主にいろいろと仕事をさせようとした。しかしその一方で、それにより名主の能力を引き出すと、名主の権威が高まり、町奉行所にとっては厄介な存在となる。つまり、名主には働いてほしいが、名主が働き始めると自分たちの思うようには動かなくなるという矛盾である。それゆえ、幕府による名主組織の取扱方針は一貫せず、しばしば正反対の方向へと振れたのである。

* 川村学園女子大学講師

例えば、寛政2年（1790）10月の寛政改革の折に、老中の松平越前守定信と南町奉行の池田筑後守長恵は肝煎名主を設置した。肝煎名主とは名主の組合ごとに置かれた1～2人のリーダー的な存在で、その名主が組合の中を治めた。しかし文政6年（1823）7月、老中の水野出羽守忠成は肝煎名主を廃止しようとした。天保2年（1831）2月14日付けの北町奉行所与力書取には「肝煎名主之儀は上にて御嫌に有之、既減切之積に相成²⁾…」と、幕府上層部（「上」は出羽守たち幕府上層のことか）は肝煎名主が嫌いなので減らし切りにする（「減切」は病気や老齢などで辞めた後に後任を補充しないこと）とある。最終的には水野の思い通りにはいかず、廃止ではなく縮小ということになるが、このようなことを老中が行ったのである。

それに対して、天保2年12月には、北町奉行の榊原主計頭忠之が、老中水野の反対をかわしつつ、減らし切りとなっている肝煎名主のかわりに世話掛名主を設置した。これについては、「往々却て肝煎名主よりも威光相増可申哉…後弊も無覚束被存候³⁾」という、世話掛名主設置に慎重な南町奉行所与力の抱く懸念もあったが、このように名主に対する幕府の政策は一貫していない。

名主の役割の拡大や組織の発達、時代が下がり、社会・経済の変容が大きくなるにつれて顕著になっていくと考えられるが、従来の研究ではそうした拡大・発達について十分な評価がなされていない。特に、社会矛盾が大きく露呈した天保改革期以降の名主の動向にもっと注目する必要がある。また、これまでの研究は、こうした名主の活動を幕府による都市支配の単なる補完としてのみとらえがちであったが、幕府の想定を超えて都市行政を遂行していく名主たちの主体的な動き（幕府にとってはときに忌避すべき動きでもあった）を見出すことも可能ではないだろうか。

以上の問題関心にに基づき、本稿では掛名主をめぐる「ジグザグの途」の一局面をみていきたい。

なお、以上の話は江戸に特有のことである。江戸の名主は専業であるが、他の都市では一般的に名主は何か商売をしていて、町内の商工業者の代表者が名主のような役割を担う、つまり町人代表として名主が存在するというのが本来的な姿である。しかし江戸の場合はそうではなく、名主は商売をせず名主を専門に仕事とした（なお京都では名主の代理人のような者が存在した）。こうした名主専業というあり方は、社会の変化のスピードがはやく都市行政の仕事が増大する巨大都市においてあらわれてくると考えられる。つまり江戸に独特の名主のあり方は、巨大都市および首都という特性に影響されたものと考えられる。また、江戸の名主は「町人」から離脱し（名主の専業化）、最終的には自分が支配する「町」からもだんだんと切り離され、江戸全体をみて仕事をする人たちが生まれてくるが（都市官僚化）、これも江戸の名主の特徴であると考えられる。

1. 苗字三名主入牢一件と諸掛名主の廃止

安政4年（1857）12月29日、熊井理左衛門たち苗字三名主が収賄容疑で摘発された。この3名は次節でみるように、江戸の名主の中でもリーダー的な扱いを受けた者たちであるが、突然収賄容疑で逮捕され、翌年2月28日に牢屋に入れられた。

【史料1】⁴⁾

○ 二月廿八日

苗字三名主入牢一件

堺町名主 熊井利右衛門^(左)
新材木町名主 石塚三九郎
岩代町名主 鈴木市郎右衛門

右三人之者、去巳年十二月廿八日夕七ツ時頃、北御番処江御呼出し、思召有之、苗字取上ゲ、名主役取放、町役人江預ケニ而、戸メ逼塞致居候処、今廿八日昼八ツ時頃、最寄名主玄関江三人共呼出し、腰縄にて、家主袴にて縄取致、茅場町大番屋へ送り込候通り、吟味之上直ニ入牢、翌廿九日御呼出し、もつかうニ乗り、北御番処へ出ル也、一日置に御呼出し有之候よし。

右一件ハ、薬種屋と砂糖屋の出入、十組取立、岡場処再興願ニ付、大金を取込候よし。

安政五年四月九日

久世大和守殿御差図

申渡

堺町已之吉地借 理右衛門^(左)

其方儀、名主役勤中懇意ニ致し候砂糖渡世太助義、同渡世之者江申合、問屋名目相立、冥加上金致度由にて、訴状案文を以其方相談請候節、文言加除致し候様申聞、其後池田播磨守御役所江出訴致し、町年寄共取調中、右之趣及承、薬問屋共より渡世差障申立、又ハ砂糖屋共より薬種問屋共相手取、難渋申立、荷物引受方申争候ニ付、其方并三九郎外一人江取扱申付置候処、重立取計、右は文化度薬種問屋之内、砂糖重立取扱候者共ハ、砂糖問屋名目相立候得共、不正之筋有之、其後差止之上咎をも申付候義ニ付、願立取上難相成筋と乍心付、砂糖之義は廻船積合之節、船足ニも相成候品ニ付、仕法相立候ハゞ運送弁利之趣、兼而及承罷在、其上太助より内証受候義も有之、旁右之趣相合、別派ニ組合相立、冥加上金相成候方に取調見込之趣申立候段、右取扱中、砂糖屋共より盆暮・時候見舞等二事寄せ、音物相贈り候節ニ受用致し候上は、願意取持候筋ニ相当り、殊ニ土蔵修復致候節、太助ニ諸払立替貰受、其後勘定相立候義ハ候得共、右一件取扱中ニ候上ハ、右体之義致間敷処、紛敷相聞候段、右始末不届ニ付、重追放申付ル。

一、

新材木町、佐和次郎地借 三九郎
岩代町、佐七地借 市郎右衛門

右兩人ハ江戸払可申付処、吟味中病死致し候間、一同其旨可存。

【史料1】は「藤岡屋日記」に記された苗字三名主入牢一件に関する記録である。牢屋に入れられた熊井理左衛門ら三名主は、もっこ（「もつかう」）に寄せられたとあるように、江戸の人たちのさらし者にされながら、1日おきに小伝馬町の牢屋敷から呉服橋の北町奉行所まで連れて行かれ、取り調べを受けた。理左衛門以外の2名は吟味中に死亡し、生き残った理左衛門は追放刑に処された。熊井理左衛門は70歳、石塚三九郎は66歳、鈴木市郎右衛門は62歳であり、高齢の3人が過酷な状況下に置かれたこと

が窺える。

この衝撃的な事件は、理左衛門たちが牢屋敷に入れられただけでは終わらず、掛名主という名主の組織の大部分が突然廃止された。それを示すのが以下の史料である。

【史料2】⁵⁾

申渡

世話掛

市中取締掛

諸色掛

酒入津掛

絵草紙并書物掛

人別掛

名主共

右名主共諸掛差免

右之通早々可申渡候

右町御奉行所依御差図申渡候間、其旨可存

十二月

右之通被仰渡奉畏候、為御請御帳ニ印形仕置候、以上

安政四巳年十二月廿九日

組々右掛

名主一同受印

右喜多村彦右衛門殿ニ而被申渡候

申渡

熊井町名主

熊井理左衛門

新材木町同

石塚三九郎

長谷川町同

鈴木市郎右衛門

右之もの共苗字取上ケ、名主役取放し可申渡候

右町御奉行所就御差図申渡間、其旨可存

巳十二月

前書之通被仰渡奉畏候、為御請御帳ニ印形仕置候、以上

安政四巳年十二月廿九日

堀江町名主

熊井理左衛門

煩ニ付代

久 次

新材木町同

石塚三九郎

煩ニ付代

角 蔵

長谷川町同

鈴木市郎右衛門

煩ニ付代

徳兵衛

差添組合

新乗物町

名主 三郎右衛門

右喜多村彦右衛門殿ニ而被申渡候

【史料2】の2件の申渡から、理左衛門たちが捕まったのと同じときに、名主の組織も大きく変えられたことが知られる。これが意味するところは、三名主捕縛は単なる個人的な収賄の摘発ではなく、なんらかの陰謀による可能性が大きい、つまり町奉行所は名主のリーダーを摘発すると同時に名主の組織を潰したものと考えられる。

2. 天保改革と諸掛名主

掛名主は天保改革のときにつくられた。具体的には、天保12年（1841）10月に市中取締掛名主、同13年（1842）1月には諸色掛名主が設置された（翌月から両掛兼帯になる）。この2つの掛は恒常的に活動を行っており、約50名の名主（名主総数の5分の1弱）が動員され、市中取締掛と諸色掛を兼帯した。市中取締掛は奢侈禁止や芝居取締など町方住民の生活全般の取締を仕事としており、諸色掛は株仲間解散後に設置され諸物価の調査・統制にあたった。これらの掛名主全体を統括するのが熊井理左衛門ら三名主で、天保13年12月に三名主は惣名主上席に登用された。熊井理左衛門は深川、ほかの2人も江戸北西の小石川や牛込という周辺部の名主であったが、彼らの支配町域を江戸の中心部に移し、そこで仕事をさせた。

掛名主は寛政改革の際に初めて設置されたが、その業務は江戸町方全域を対象とし、従来の支配町域を超えた広域的な行政を担当した。加藤貴氏はこれを名主の「新たな側面」と評価されている⁶⁾。こうした掛名主が多分野で設置されたのが天保改革期の大きな特徴で、寛政改革時には年限的・臨時的であった諸色掛も天保改革期には恒常的に置かれるといった変化もみられた。南和男氏は「天保改革において

は、以前の享保・寛政改革よりもはるかに多数の名主制の組織を積極的に活用し、諸改革実施の一端をかれらに担わせているのは注目に値する。これは天保改革の一特色といえよう。町奉行所による江戸市政の末端組織として、多くの名主を諸掛りに任じてその職務に奔走させることによって、江戸町人への干渉統制が以前より強化され、改革の諸政策実施をより徹底させることができたのである」と述べられている。⁷⁾

このように掛名主は天保改革期に活動を始めて力をもつようになるが、以下ではこの掛名主の活動事例として、川浚掛と諸色掛の活動の一端を紹介したい。

3. 掛名主の活動事例

（1）川浚掛

江戸の水路は重要な経済動脈で、これが埋まると船が通らなくなり、地域全体の経済が沈下してしまう。⁸⁾川浚はそれを防ぐ重要な仕事である。従来は水路沿いの町々が自分たちで浚渫して船が通るようにしていたが（自分浚）、不在地主の増加という町共同体の変容で、川浚の負担者（地主）と受益者（借地人・借家人）が乖離したために、川浚をはじめとする江戸の公共事業（インフラ整備）は長年機能不全に陥っていた。一部の水路は幕府も使用するため公儀浚であったが、負担を肩代わりしていた株仲間が解散したために、こちらも川浚が実施されない状態であった。この状況を解決するために、町奉行所が実施主体となって市中の主要水路を全面的に浚渫するようになるが、この新体制による川浚を市中川々浚という。費用は町会所積金や浚土による埋立地の払下代金でまかなわれたが、人員については、町奉行所の人員が少なく新しい仕事を引き受ける余裕がないため、名主たちが動員された。

右の表「市中川々浚掛名主」は、天保14年（1843）5月着工の大川三俣中洲から、嘉永3年（1850）6月着工の深川筋まで実施された川浚に動員された名主をまとめたものである。このときの川浚は8区域で実施されたが、熊井理左衛門がすべての区域のリーダーとして配属されており、この理左衛門と、埋立担当（浚いあげた土で埋立地をつくる）とも推定される南八町堀の清左衛門が中心となり、そこに地域の名主が加わる形で川浚が進められていった。理左衛門を中心とする川浚掛名主がすべての普請の監督や埋立地の管理を担ったのである。

【史料3】⁹⁾

同十七日（嘉永3年）

（中略）

一、御奉行様新地川口外式ヶ所出来形御見分

墨 引 船	熊井理左衛門	差 付 船	清水太一郎	日 除 舟	中村八郎左衛門様 萩野政七様
			高部久右衛門 岡田次助代 長次郎 差付人 半兵衛		

【表】 市中川々浚掛名主

「大川三俣中洲切通」区域および「浜町川口出洲」区域		「本所竪川筋」区域	
○深川熊井町	熊井理左衛門	○堀江町	熊井理左衛門
同 中嶋町	久右衛門	○南八町堀町	清左衛門
○南八町堀町	清左衛門	本所緑町	長兵衛
深川平野町	甚四郎	浅草平右衛門町	平右衛門
「本材木町川筋」区域		本所茅場町	助左衛門
○深川熊井町	熊井理左衛門	亀戸町	次郎助
同 中嶋町	久右衛門	深川海辺大工町	八左衛門
○南八町堀町	清左衛門	本所松倉町	喜兵衛
深川平野町	甚四郎	「土橋堀留・三拾間堀川筋」区域	
加賀町	平四郎	○堀江町	熊井理左衛門
霊岸島浜町	太一郎	新両替町	佐兵衛
坂本町	新助後見新右衛門	弓町	源太郎
本材木町五丁目	石之助	木挽町	七左衛門
「日本橋川筋」区域および「霊岸橋川筋」区域		本材木町五丁目	石之助
○堀江町	熊井理左衛門	○南八町堀町	清左衛門
新材木町	石塚三九郎	西紺屋町	六右衛門
長谷川町	鈴木市郎右衛門	柴井町	八郎右衛門
小網町	伊兵衛	「深川筋」区域	
霊岸島浜町	太一郎	○堀江町	熊井理左衛門
深川中嶋町	久右衛門	○南八町堀町	清左衛門
南茅場町	甚七	深川材木町	市郎次
西河岸町	清右衛門	同 中嶋町	久右衛門
「荒和布橋・思案橋川筋」区域		同 海辺大工町	八左衛門
○堀江町	熊井理左衛門	霊岸島門前町	九左衛門
新材木町	石塚三九郎	霊岸島浜町	太一郎
○南八町堀町	清左衛門	深川相川町	新兵衛
村松町	源六	出典：国立国会図書館所蔵旧幕引継書中『川筋浚書留』 （小林信也『江戸の民衆世界と近代化』より）	
新乗物町	和十郎後見三郎右衛門		
室町	助右衛門		
「京橋川筋」区域			
○堀江町	熊井理左衛門		
新材木町	石塚三九郎	御奉行様 仁杉八右衛門様 都築十左衛門様	
霊岸島浜町	太一郎		
深川中嶋町	久右衛門		
○南八町堀町	清左衛門		
桶町	藤兵衛		
新両替町	佐兵衛	日除船 中田林五郎様 大竹銀蔵様 笹岡小平太様	
本八町堀町	庄兵衛		

日除船

中田林五郎様
大竹銀蔵様
笹岡小平太様

日除船

御奉行様
仁杉八右衛門様
都築十左衛門様

御 先 船	田中市郎次	差 付 船	島崎清左衛門	御小屋残
	海辺八左衛門		相川新兵衛	大竹彦五郎様
	岡田治介		差付人	佐野三郎次様
	代与三郎		藤次郎	

右之通ニ而永代橋東橋番所際々御乗舟、新地川口々大島町川通相川橋川筋共御見分相済、小松町河岸々御上り御詰所御休息之上、同所々御駕籠ニ而本所菊川町御下屋鋪御廻相成候、名主共千鳥橋際迄御見送致候事、

【史料3】は、川浚終了後に、見分する船に乗り込んだ人員を書き上げたものである。「御奉行様」とあるのが町奉行の遠山左衛門尉景元で、日除けのついた立派な船に乗っているが、この一行の先頭には熊井理左衛門が乗っており、浚渫の出来映えをチェックして墨を付けていった。「岡田次助（治介）」はお台場をつくった土木請負業者として著名な人物であるが、このような人たちが中心になって新しい形の公共事業を進めていった。

（2）諸色掛

諸色掛は本町三丁目にある水茶屋亀の尾を拠点にして活動した。それまでの名主は自分の居宅で仕事をしていたが、諸色掛の名主は亀の尾に出てきて詰め切りで仕事をした。つまり名主は自分の私宅から離れて、亀の尾という場所に集まって恒常的に仕事を行うようになったのであり、これは注目すべき点と考える。

次にあげる史料は、嘉永5年（1852）4月付けの諸色掛名主上申書の一部と同年9月付の町年寄上申書の冒頭箇所である。この史料にはなぜ亀の尾に集まって仕事をしたのかという理由が書かれている。

【史料4】¹⁰⁾

（諸色掛名主上申書）

諸問屋再興去三月中被仰渡候以来、私共下調被仰付候ニ付、銘々手元限ニ而下調仕候而者不弁ニも有之、且浮説受候儀も難斗奉存候間、私共立合之上、下調仕、都而壺人一己ニ而下調方不相決事ニ申合、殊ニ御役所手遠ニ而者差支候儀も御座候間、去三月中々本町三丁目安次郎地借水茶屋五兵衛方ニ而、私共立合下調仕候而、当時相残候分、

（中略「下調」が済んでいない硫黄問屋以下、21種の仲間の名称と現在の進行状況とが記される。）

右之通相残、其余百拾廉者、再興名前帳取極、追々済寄候間、一ト先右下調所江日々罷出候儀見合、尤書面之廉々未御調中ニ付、以来壺ヶ月六度宛、右五兵衛方江私共罷出、立合之上、下調仕、勿論急御用之節者、御配符次第罷出、取調可仕候、此節迄に春米屋等多人数調印相済候間、此段奉伺候、以上

子四月

諸色掛名主共

（町年寄上申書）

諸問屋再興ニ付、重立候名主共日々寄合、名前并新古拾ひ分ケ取調候、多人数市中端々之もの迄も罷出候ニ付片寄場所ニ而は差支、本町三町目亀の尾と申水茶屋江寄合、当三月以来、昼夜相調、（後略）

下線部をみると、名主たちが銘々の手元限りで調査をやっていたのではうまくいかず、またよからぬ噂を呼ぶのもよくないとあり、みなで集まってお互いにチェックをしながら協力して経済統制を進めていくために、亀の尾という場所をつくったことが知られる。すべて一人で決めず、まわりの人にチェックを入れてもらいながら仕事をする、つまり名主が組織として動くということである。なおここには記されていないが、亀の尾では料理をとらず弁当持参とし、不要な飲み食いをしないなど、細かな取り決めもなされている。

次に示す史料は、江戸で行商する越後縮出稼人と江戸呉服問屋との対立に関して、『白木屋文書』の「再興越後縮出稼人熟談仕法帳」に記された嘉永6年（1853）の記事の一節である。

【史料5】¹¹⁾

右者、六月廿二日、旧記本書持参ニ而亀之尾江罷出候所、当日熊井氏御出勤無之、同廿七日、尚又罷出入御覧ニ候得者、慥成書類之由被申聞、右之写早々認メ当席江差出候様并前書伺書ハ西之内堅紙館役所宛ニ書取、口上書ハ半紙堅帳ニ認メ其外旧記書類写取差出候様御談ニ付、同廿九日、亀之尾江差出置、其段熊井氏江相届候得者、承知いたし候段被申聞候并福嶋氏江も相届候事

天保改革期に解散された株仲間は、嘉永4年（1851）3月9日にいわゆる株仲間再興令が出されて復活し、亀の尾ではその仲間再興の手続きが行われたが、この史料では、株仲間再興の下調作業がほぼ完了したと考えられる嘉永5年4月以降も、出稼人と呉服問屋との対立をめぐる一件に関して熊井理左衛門が中心となり、町年寄（「館役所」）宛伺書の作成に関する指示や、呉服問屋仲間の「旧記」の証拠能力の判定などが行われたことが確認できる。名主たちは亀の尾で活動を続け、亀の尾が仲間内外の同業者同士の紛争を調停する場となっていたことが知られる。この後には、問屋仲間と出稼人たちの両方が書類を亀の尾の名主寄合へ提出し取調を受けることになったことも知られ、名主寄合が商人たちの間の紛争に対する取調の場として機能している状況を確認できる。紛争が町奉行所に持ち込まれる前に内済となることも多く、水茶屋亀の尾が経済統制の中心になっていったといえる。

おわりに

これまでみてきたような掛名主を積極的に活用しはじめたのは、天保改革の主役である老中水野越前守忠邦や南町奉行鳥居甲斐守耀蔵であったが、彼らが失脚した後も、安政年間に至るまで諸掛名主の活動は継続した。彼らが、広く都市問題の解決を引き受けることで、江戸町方の都市行政において欠かせ

ない存在へと成長したからであろう。

しかし、この成長は順調には続かず、安政4年（1857）7月6日、米方掛名主が廃止され、その業務は町奉行所へ移された。これは、やがて実施される大々的な掛名主廃止の前触れであったのだろうか。安政4年12月25日には、米国使節の受け入れにともなう様々な業務に奔走した三名主をはじめとする名主35名が南町奉行所に呼ばれ褒賞されたが、そのわずか数日後に三名主は収賄容疑で摘発され掛名主は大部分が廃止された。

その後、町奉行所は自分たちが中心となって行政を行おうとするが、掛名主たちを排した町奉行所を主体とする行政遂行の体制は早くも半年後には行き詰まった模様である。掛名主たちの活動が徐々に再開されていく様子をうかがうことのできる史料もあるが、その後の展開についての検討は今後の課題である。¹²⁾

註

- 1) 本稿は東京都江戸東京博物館都市歴史研究室シンポジウム「江戸の町名主—町の仕組みと名主の生活—」（2011年2月19日）で行った報告の内容を文章化したものである。
- 2) 『大日本近世史料 市中取締類集』五（東京大学出版会、1965年）4頁。
- 3) 同上、19頁。
- 4) 『藤岡屋日記』第8巻（三一書房、1990年）。
- 5) 「布告留」（『江戸町触集成』第17巻、塙書房、2002年）16028・16029。
- 6) 加藤貴「寛政改革と江戸名主」（『国立歴史民俗博物館研究報告』14、1987年）。
- 7) 南和男『江戸の社会構造』（塙書房、1969年）。
- 8) 本節の内容の詳細は、小林信也『江戸の民衆世界と近代化』（山川出版社、2002年）参照。
- 9) 「深川筋川々御浚書留」一（『重宝録』第6巻、東京都、2006年）。下線は引用者による。以下同。
- 10) 『大日本近世史料 諸問屋再興調』二（東京大学出版会、1959年）133～137、143～146頁。
- 11) 東京大学経済学部所蔵『白木屋文書』『再興越後縮出稼人熟談仕法帳』。
- 12) 詳細は、小林信也「天保改革以後の江戸の都市行政」（『関東近世史研究』58、2005年）。